

# 地域のことばはどのようなようにして残るか

——『三訪会会報』を資料のひとつに——

藤 本 真理子

## 一 はじめに

本稿では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「方言シリーズ」みなり弁ばあ」の資料紹介と、そこで見られた記述について考察を行う。この考察により、地域に住む高年層にとっての「方言」とは何かを明らかにしていくとともに、地域住民のもつ方言意識がどのように資料上に残されるのかという、方言意識と資料への記録の残りやすさとの関連性を探ろうとするものである。

「方言意識」の問題という点、地域に住む人々がその地域の言葉すなわち方言に対して、親しみやすい、あまり使わない、おしやれでない、などといったように、人々が方言に対してどのような印象を抱

いているかということに重点が置かれてきた。しかし、文献言語学の面から見ると、今回取り上げるような各地域で作成されている多数の方言書の記録内容をどのように評価すべきかという問題がある。また社会言語学の面からは、地域社会における、個人のアイデンティティを支える資源の一つとしての言葉の側面をとらえることになる。

## 二 『三訪会会報』「みなり弁ばあ」

### 二・一 資料紹介

本節では、『三訪会会報』「方言シリーズ」みなり弁ばあ」について、紹介する。この資料は、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌である『三

訪会会報』(二〇〇二年創刊)で二〇〇二年(創刊号)と二〇一〇年(四五号)までの八年間、掲載されたもので、全四五回が確認できる。取り上げられた語彙数は、一回の記事に一語とは限らないため、数はこれより多い。執筆は事務局として編集も兼ねていた板原數彦氏による。板原氏がどのような経緯でこの項目を執筆していたかについては、今後、当時の様子などの聞き取りをしながら把握していきたい。まずは、項目内容から把握できる範囲で、執筆の動機として示されたシリーズ開始の項目から一部を示す。

(1) (略) 最近では方言をしゃべる人が少なくなつて死語となつたものもたくさんあります。変わりに「ダツテサ」とか「ワカンナイ」などと東京弁が幅を利かせていますが一方で全国ブランドになつたものもあります。たとえば「〇〇じゃーん」とか「おんどりやあ(おどりやあ)」などです。でも方言をしゃべるのはブシャークで東京弁をしゃべるのがカッコイイと思われているふしがあります。つまり郷土に誇りがもてないのではないでしょう。

そこでこのシリーズでは地方の文化そのものである「方言」について取り上げてみたいと思います。(略)

(創刊号、三頁、二〇〇二年六月一日)

(1) の傍線部から、このシリーズを執筆した板原氏が「東京弁」と呼ぶ標準語と地域方言を対立する関係としてとらえており、地方のことばである「方言」については、アイデンティティそのものとして考えていることがわかる。今回紹介するような方言を集めたり、まとめて報告や紹介したりすることは全国的に見られる。自治体が地域活性化などの目的もあって、ホームページの一部で紹介を行うことも少なくない。しかし、この「三成弁ばあ」での方言の紹介は、多くは三成地区に住む高年層の会員に向けてのものであることから、どちらかというところ、自身のアイデンティティとしてのことばへの意識が強いものとうかがえる。

なお、先行する他資料との関係については、具体的にどの書籍や資料を参考にして作成されたかは現時点ではわからないが、(2) に見られる記述からも、参考にした資料がまったくなかつたとは考えに

く。

(2) インターネットで「尾道弁」をキーに検索す

ると意外と沢山の「尾道弁辞典」のようなホームページを見ることが出来ます。郷土の方言を死語にすまい。(略)

(二号、二頁、二〇〇二年九月一日)

## 二・二 項目紹介

シリーズ全四五回の中で、取り上げられた語彙は、動詞・形容詞・副詞・名詞、また「ちゃった」や「ねきいよれえ」のような語句などである。「ちゃった」などのかたまりでとらえられる語句については、そのかたまりで立項されていることも確認できる。次にあげるのは、動詞で項目、またはそれに準ずる形で紹介された項目である。

(3) あずる・うがす・おらぶ・にがる・ごういる・

さばる・すえる・そやす・たぐる・つばえる・

ぬぶ・のうくる・はぶてる・ひわる・へたる・

ほがつとる・みてる・めぐ・もぶれる・やげる・

ゆうかす・よかる

これらの立項に対し、内容は辞書的な記述のように統一したものではない。号が進むにつれ、シリーズとしての体裁が意識されていく過程が見てとれる。たとえば、シリーズの初めにはナンバリングが付されていないが、回が進むにつれ、「みなり弁ばあ」というタイトルとともに、第何回めであるかが示されるようになっていく。初期から意識して示されていたこととしては、見出しがあり、取り上げる項目が何であるかを明確に示すということ、そして項目の意味解説を付すということであった。さらに(4)の傍線部に挙げられるように、その語彙を用いた例も合わせて示されることが多い。

(4) あずる／(略)「やって出来ないことはないが、

ちつとやそつとでは出来ず困難を極めるときに使う。」この機関紙、毎回作るんにあずるんでえ。

(略)

(二号、二頁、二〇〇二年九月一日)

これらも、前節で示したような、先行する方言の記録資料を参考にされたことのあらわれと考えられる。

### 三 「みなり弁ばあ」に見られる方言意識

二・一節で述べたとおり、アイデンティティを支える資源として地域方言をとらえていたとみられる本資料において、どのような方言意識が働いていたと見るべきか。

#### 三・一 「みなり弁ばあ」での地域のとらえ方

まず、このシリーズのタイトル「みなり弁ばあ」からもわかるとおり、取り上げられるのは「広島方言／弁」でも「尾道方言／弁」でもなく、「三成弁」なのである。そしてこの三成弁は、(1)で示したような「東京弁」に対する地域方言として、または次に示すように「標準語」に対する地域方言としてとらえられている。

(5) いびせえ／(略)「ちようてい」Ⅱ(こわい)

と同義語に使っている地域もあるらしいが、私たちが三人はこわいというよりむしろ不気味な様を表すのに使っていたと思う。(略)

(三号、二頁、二〇〇二年一月一日)

(6) すえる／飯が腐ること 又はその匂いも含めた状態(略) 漢和辞典を引くと「饘」という字がちやんと存在しており、ワープロを打つても饘える(すえる)が出てくるから方言といえるのかどうか。…と言うより「飯が腐る」では無く、我が三成で使っていた「饘える」が標準語だったとおこう。(略)

(一五号、二頁、二〇〇四年一月五日)

(5) (6)では、「私たち三成人」や「我が三成」という説明も見られ、「三成」地区という限定した地域への意識、そしてそれが確たるアイデンティティを形成するよりどころとしてとらえられていることがわかる。これは執筆者に限ったものではなく、この会報全般を通し、読者にも少なからず同様の意識があると見てとれる。

なお、「三成」「東京」それ以外の地域については、

(6)の続きには「香川県」「愛知県」ではどのように言っているかが示されている。(7)も同じく他の地域との比較検討が行われている。

(7) たぐる／吐ると書けば、吐(は)く、吐き出

す。または、咳をする、咳き込む、の意味(略)

各地の方言を調べてみると、咳をするという場合、この「たぐる」は瀬戸内海を囲む各県で広く使われ、山陰から山口県、九州東部では「こつめく」「こつる」などとも云っている。(略)

(一八号、三頁、二〇〇五年七月一七日)

また、(7)や次の(8)を見ると、三成地区のある尾道市、そして広島県を言語区分としてどのようにとらえていたかということも記述からうかがえる点がある。

(8) ぬぶのびる／「のびる」は①長くなることであり「おみやあ、背がぬんだのお」というふうにする。(略)

埼玉県・栃木県など東京近辺や徳島県・香川県などでは「のだつ」。高知県では「のだる」。富山県では「のぼる」。新潟県では「ひとる」など様々な表現をする。背が大きくなることだけでなく全体に大きくなることを「ふとる」ともいう。(略)

(二四号、七頁、二〇〇六年九月九日)

三・二 「みなり弁ばあ」での時代のとらえ方

「みなり弁ばあ」では、今と昔を比べた内容が多く見られ、特に、次の(9)や(10)に見られるような、「戦前生まれ」と「戦後生まれ」の対立が意識的に示されている。

(9) いびせえ／この言葉も戦後生まれの人たちはほぼ使わないのではないだろうか。

傷がばっくり口を開けているのを見た時などに使う。(略)

(二三号、二頁、二〇〇二年二月一日)

(10) しんびように／辛抱強く。熱心に続ける。この言葉も戦前生まれの人でないと余り使わない言葉だろう。

この時代の人は、なべて辛抱強い人が多い。激動の時代で、二つの大戦を経験し、自由にものが言えない暗い世の中が長く続いて、生きてゆくのが大変な時代を皆必死で潜り抜けてきたからだ。旧い家族制度の基で、特に女性は辛抱強くならざるを得なかった。太平洋戦争末期か

ら終戦直後は、食糧難にも見舞われ、子どもも大人も皆辛抱した。

あその嫁さんはしんびようによく働く。とか、じゅんならんとか言う。なかなかしわい子がいて何しようんならとケンカもするが、今の子のように我慢しきれず、刹那的に人を刺したりはしなかった。イジメもあったが、今のよう陰湿ではなかったと思う。

親だけでなく地域の人からも、物も人も大切にすることを教え込まれていた。云うことを聞かないとしごうされた。大人も子どももしんびように働き、地域で助け合っていた。物は無かったが心までしけとった訳ではない。経済が高度成長を遂げたあたりからじねんに人心は荒廃したようだ。

今は、地域の活動でも、自分が何かの役についた時は一生懸命するが、外れば知らん顔する人が多い。挨拶も出来ない。人間一人では生きてゆけないのだからしんびように働き、助け合うことが大事だ。

じなくそ言うなという人も居ようが、昔が全部良かった訳ではない。昔に学ぶところが多い

ということだ。

(一四号、二頁、二〇〇二年一月一日)

戦前と戦後という示し方により、単なる時間的経過だけでなく、生活様式や社会構造の変容などにも、ことばの記述を通して目を向けた内容になっている。

### 三・三 「みなり弁ばあ」での語源説

「みなり弁ばあ」の項目説明の中では、語源にふれるものもある。

(11) はぶてる⇨すねる ふくれる／自分の気持ちを分ってもらえず、わざと逆らった態度をとるの意。「ひがむ」や「ひねくれる」とは多少意味が違う。

はぶてるは、上記、拗ねるとは微妙に違うような気もするが、広島県の沿岸部にだけある方言のようで、どの地方の方言を調べてみてもこれに似たものは無い。語源は何だろうか。(略)

(二七号、四頁、二〇〇七年四月二七日)

(12) よかるⅡもたれかかる(塀などへ)、よかりかかるという意味。

三成弁の「よかる」は「よりかかる」(寄掛)が、なまつたものと思われる。(略)

(三九号、三頁、二〇〇九年七月四日)

この語源意識を見ていくと、古語を意識した記述も(13)や(14)のようにみられる。

(13) いびせえ(略)

語源は万葉集や枕草子にでてくる「いびせし」という古語と同じだろう。ちなみに万葉集2991では「たらちねの母が飼う蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして」とある。(略)

(三二号、二頁、二〇〇二年一月二日)

(14) ほがつとる ほがる／(略)三成弁では体が熱い、もえるという意味になる。長距離を歩いた後などに「足(体)がほがって」「ほがって」に傍線あり「寝れなかった」などと使う。(略)  
古語(中央語)の「ほ」は秀(秀でるの意を表し、秀つ手)、火(火群たつ)、百(八百万の神)

などと他の語と合わさって複合語をつくる。

まったくの私見を披露すると三成弁のほがつとる、ほがるも【「ほがつとる、ほがるも」に傍線あり】古語の「ほ」から来ているように思っている。間違っていたらお許し願いたい。正しい説を教えてください。 (略)

(三二号、四頁、二〇〇八年二月二〇日)

ここで示したように、三成弁と古語とのつながりを考えていたり、古語にあるものをいまだに使っていることに気づかせたりというものも見られた。三成弁がどのような由来を持つかについて考えようとする意識がうかがえた。

#### 四 まとめ

本稿では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「方言シリーズ」みなり弁「ばあ」の資料紹介を行った。さらに、資料に見られた方言意識、地域のとらえ方、ことばの変容に影響を与えた時代区分の考え方、また語源説から見えてきた古語との関連性への期待について述べた。

この資料での記述を通して、地域住民のもつ方言意識がどのように資料上に残されるのかという、方言意識と資料への記録の残りやすさとの関連性を探るために必要な資料性について確認した。外部から見れば、尾道としてくられそうな地域において、今回調査した資料のおさめられている『三訪会会報』を作成している「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」があることは地域やことばを支え、また考える上で非常に重要である。「三成では」と取り上げて特定の地域のことばが考えられ、「みなり弁」と呼んで解説が加えられた本資料の個別の語彙項目については今後、さらに分析をしていく必要がある。

また今回は高年層による方言の記述を見たが、これが若年層ではどうであるか、また地点や時代を變えるとどのように文献上にあらわれるかについては、現在、関西圏の若年層で調査中の資料と対照をすすめていく予定である。また、歴史的にも近世期以降、多数の方言資料が各地で確認されるため、それらとの対照を行っていきたい。

#### 調査資料

三成地区の歴史と自然を訪ねる会『三訪会会報』

創刊号〜三四号

三成地区の歴史と自然を訪ねる会『三訪会会報』

三五号〜五八号

#### 参考文献

真田信治（二〇一八）『地域・ことばの生態』、真田

信二著作選集 シリーズ日本語の動態 第2巻、

ひつじ書房

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00633 の助成を受けたものです。

— ふじもと・まりこ 日本文学科准教授 —